

2005 年前期「基礎教育アンケート」結果の概要報告

基礎教育センター・助教授

舛本 直文

はじめに

2005 年度前期に FD の一環として実施された「基礎教育アンケート」調査結果の概要を報告する。全体の回収率は 38.5%と低い結果となったが、首都大の基礎教育の授業に関心が高く、アンケートに積極的に回答してくれた学生たちの意見として、貴重な意見が反映されていると考えられる。一方で、これらは一部の学生の意見にすぎずバイアスがかかっているとも言えなくもない。しかし、熱心な学生達が提示した貴重な意見として、結果の概要をそのまま報告する。なお、調査結果の報告の前に、先ず前提として首都大学の目的目標および教育課程の編成や各教科の特徴を押さえておくことにする。

1. 実施の概要

実施主体：基礎教育センターおよび基礎教育部会

対象者：首都大学東京の 1 年生(1,630 名)

実施方法：前期の「基礎ゼミナール」の授業にて配布授業にて配布・実施(平成 17 年 7 月 11 日～29 日)

回収：7 月 11 日～8 月 2 日

回収方法：6 号館 1F、1 号館 1F に回収箱設置

回収率：628 票/1,630 名=38.5%

7 系列別回収結果一覧(表 1 参照)

調査項目の構成と尺度(別紙調査票参照)

- ・5段階尺度・マークカード方式：全 20 問
- ・基礎ゼミナール：4問
- ・実践英語：4問
- ・情報リテラシー実践 I：4問
- ・都市教養プログラム科目：4問
- ・基礎教育の仕組み：4問
- ・自由記述(1. 良かったと思うこと、2. 改善してほしいと思うこと、3. 時間割、開講時限やカリキュラムへの自由記述)

前提 1：学則から見た首都大学東京の目的

学則第 1 条：目的及び使命：東京都における学術の中心として、東京圏の教育機関及び研究機関と連携して、大都市における人間社会の理想像を追求することを使命とし、広い分野の知識と深い



専門の学術を教授研究するとともに、大都市の現実に立脚した教育研究の成果をあげ、豊かな人間性と独創性を備えた人材を育成し、もって都民の生活と文化の向上及び発展に寄与することを目的とする。

前提 2：学則から見た首都大学東京の教育課程

学則第 3 4 条：教育課程の編成方針：2. 教育課程の編成に当たっては、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養することを基礎として、当該学部および学科に係わる専門の学芸を教授するように配慮する。

3. 教育課程の編成については、常に点検及び評価を行い、その改善に努めるとともに、授業の内容及び方法の改善を図るために組織的な研修及び研究の実施に努めるものとする。

前提 3：学則に規定された基礎教育科目の構成

学則第 35 条：「都市教養科目群」：実践英語科目、情報科目、基礎ゼミナール(都市文明講座含む)、都市教養プログラム/「共通基礎教養科目群」：共通教養科目、理工系共通基礎科目

前提 4：首都大学のホームページに記載された「基礎教育」の目的・目標および「基礎教育科目」の特徴

首都大学東京に入学すると、主に1, 2年次に履修する「都市教養科目群」「共通基礎教養科目群」の学習を通じて、都市の抱える課題とその解決技法、大学で学ぶための基礎力、専門教育の前提となる基礎的知識・技術を学びます。

「基礎ゼミナール」の標語:「語り合う、そこからわかることがある」

都市文明講座で、都市社会の抱えるさまざまな課題を理解する。その後、担当教員の設定したテーマに基づき、課題解決に必要な技法を体験的に習得していく。表現力やプレゼンテーション能力を向上させるための調査、口頭発表、レポート作成等の実施と、豊かな人間関係の形成を促すための共同研究や討論を中心とした、少人数(25人程度)の演習形式の授業。

「実践英語」の標語:「話せる喜び、聞ける楽しさ」英語4つのスキル(話す、聞く、書く、読む)を反復して学習することで、実践的な英語を身につけることを目標。全員が履修するNSE(Native Speaker of English)担当のコミュニケーションを中心としたクラスでは、話せる、聞ける英語の習得を目指す。25人規模で、レベル別にクラス編成。一つのクラスはNSE担当のコミュニケーション中心授業。もう一つのクラスは日本人担当のリーディング中心授業。

「情報リテラシー」の標語:「使えるだけじゃない、武器になる」パソコン等を取り扱う能力だけでなく、ものごとを正しく認識し、そこにある課題を発見し、その解決にIT(情報処理技術)を活用する能力の育成を目指す。パソコン等の使い方を習熟するとともに、それを具体的な課題の解決に挑戦する「課題解決型」の授業を行う。

「都市教養プログラム」:所属するコース・学科に関わらず、幅広い学問分野を学ぶことができる。都市にまつわる4つのテーマに沿って、学問分野による4つの学系と実験・体験型科目(インターシップ)から総合的に学ぶ。都市教養教育の中心部分であり、首都大学東京のアイデンティティとして、すべての学生が履修するもの。

以上のような前提を確認した上で、アンケート結果の概要を概観してみる。

2. 結果の概要

「基礎ゼミナール」(図表1-1)

全体傾向から見てもまずまずの評価を得ているといえる。約70%弱の学生が「興味を持って主体的・意欲的に取り組むことができた」と答えている。一方で、この科目の目的である「ディスカッションやプレゼンテーションの能力が身に付いた」と回答した学生は48.5%と半

分を切っている。

「実践英語」(図表1-2)

この科目では、全体的に否定的な回答が多かった。「興味を持って主体的・意欲的に取り組むことができた」と答えた学生は39.9%と3分の1強であり、逆に18.0%が否定的な回答をしている。実践的な英語力が身に付いたとの回答は28.5%とさらに少なく、28.0%もの学生がそう思わないと回答している。「日本人教師とNSEとの組み合わせに興味を持って学習できた」と肯定した学生は38.7%であり、そう思わない学生は20.8%であった。

「情報リテラシー」(図表1-3)

この科目はまずまずの評価を得ている。「興味を持って主体的・意欲的に取り組むことができた」と答えた学生は48.5%であり、否定的な回答は14.5%であった。「パソコンの活用力が身に付いた」と肯定的に回答した学生は62.3%と高い割合を示しており、否定的な回答は10.0%であった。しかしながら、「情報活用力が身に付いた」と答えた学生は45.7%と減少している。

「都市教養プログラム」(図表1-4)

この科目に対する回答は全体的に否定的であった。「興味を持って主体的・意欲的に取り組むことができた」と答えた学生は、39.6%であり、否定的な回答は18.2%であった。「都市に関連する課題を系統的に学ぶ仕組みに興味を持てた」という、この科目の仕組みに関する肯定的な回答は22.0%と低かった。一方、否定的な回答は31.2%と肯定的な回答を上回っていた。「選択した科目が自分の関心に合っていた」と答えた学生は39.0%、否定は19.2%であった。「都市に関するテーマに総合的・学際的にアプローチする考えが身に付いた」と答えた学生は20.6%であり、否定的な回答は28.8%と、これも否定的な回答を上回った。

「基礎教育の仕組み」(図表1-5)

この問への回答も全体的に否定的な回答が非常に多かったといえる。基礎教育の仕組みに「興味を持って主体的・意欲的に取り組むことができた」と答えた学生は28.8%であり、否定的な回答は21.4%であった。「基礎教育によって実践的な学力が身に付くと感じることができた」学生は24.4%であり、そう感じなかった学生は25.0%であった。「シラバスと授業内容がほぼ合致した」と答えた学生は36.5%、そう思わなかった学生は21.4%であった。「時間割の編成が満足できるものであった」と肯定した学生は20.2%、「そう思わない」という否定的な回答は46.8%であった。

3. 7系列(学部・学系)間比較(図表2)

この折れ線グラフは学部・学系7系列の比較をしたものである。各系の回答結果の傾向を比較すると、大まかな傾向として以下のような特徴が見られる。人文・社会系は「実践英語」「情報リテラシー」に評価が低く「都市教養プログラム」に対して評価が高い傾向がある。法学系は「基礎教育の仕組み」に評価が高いが他に対しては評価が低い。経営学系は「情報リテラシー」に評価が高く他に対しては低い。理工学系は全てに対して評価が低い、中でも「都市教養プログラム」に対して評価が低い。都市環境学部は「都市教養プログラム」と「基礎教育システム」に評価が高い。健康福祉学部とシステムデザイン学部は「基礎ゼミ」「実践英語」「情報リテラシー」に評価が高い。このような評価結果のばらつきは学生たちの事前の能力や専門的な志向の差によるものと推察されるが、別の観点からの調査分析が必要とされよう。

4. 問20の時間割への満足度における「満足群」と「非満足群」の比較(図表3)

1)両群間で0.5ポイントの差があったものは「基礎ゼミ」の中の設問項目で「ディスカッションやプレゼンテーション能力」、「実践英語」では「興味や意欲」「実践力」「NSEと日本人教師の組み合わせ」、「都市教養プログラム」では全設問項目、「基礎教育のシステム」では「興味や意欲」「実践的学力」「シラバスの一致」という設問項目であった。これらの項目に関する判断の差が基礎教育科目の時間割に対する満足度の差となって現れたと推察される。

5. 学生評価の自由記述の傾向分析(カテゴリー別、キーワード別整理)

学生の授業評価では、自由記述として、よかった点、改善点、自由記述の3カテゴリーで意見を聴取した。改善点に関する自由記述が38.8%と一番多かった。よかった点として寄せられた自由記述は24.4%であった。自由な意見は36.8%であった(表2参照)。キーワード別では、「時間割」に関する意見が一番多く、次いで、「基礎ゼミ」「実践英語」「都市教養プログラム」などのカリキュラムに関するものが続いた(表3参照)。

まとめと課題

今回のアンケートでは回収率が38.5%と低く、得られた回答は熱心な学生の意見が多く反映されているというバイアスはあるにせよ、「基礎ゼミナール」では一定の評価を得たと言える。ただしディスカッションやプレゼンテーション能力の開発というこの科目の独自の目的達成はまだ充分とは

いえない。

「実践英語」では、実践力を育成すること、およびNSEと日本人教師との組み合わせに再検討の必要性がうかがえる。

「情報リテラシー」では、コンピュータの活用力は評価できるが、情報活用能力開発は改善の余地がある。

「都市教養プログラム」では都市課題への興味、総合的・学際的アプローチ能力の開発が求められる。

「基礎教育システム」では、興味・意欲の喚起、時間割編成の自由度、シラバス内容の授業との合致、実践的学力共に再検討の必要性が示された。

自由記述では、「時間割」への改善要望が一番多く、次いで「基礎ゼミナール」「実践英語」「都市教養プログラム」への改善要望の意見が多く見られた。

以上のような結果から、教員サイドで今後必要と思われる改善すべき作業は、まず第1に「全学的な基礎教育への共通理解」の必要性である。つまり、首都大学東京の目的・使命と基礎教育の連携および目的の再確認がまず第1に必要である。ついで、基礎教育目的の実現のため、各科目ねらいを再確認することである。さらに、専門性を勘案した基礎教育の系統性や時間割編成の自由度、シラバスの充実などが、教育改善に向けて重要であるといえる。

このような問題確認をふまえた授業システム構築やカリキュラム改善、さらには授業方法の改善に向けた取り組み、いわゆるFDが必要とされる。

表1. 自由記述の7系列分類

首都大学入学者数	回収数	回収率	記述数	
人社	229	96	42.0	95
法学	245	96	39.2	80
経営	244	77	31.6	56
理工	272	98	36.0	77
都市環境	212	63	29.7	30
システム	225	87	38.7	37
健康福祉	203	107	52.7	68
小計	1630	624		443
		不明4		不明3
合計	1630	628	38.5	446

表2. 自由記述のカテゴリー別集計

カテゴリー	集計件数	割合(%)
1. 良かった点	109	24.4%
2. 改善点	173	38.8%
3. 自由意見	164	36.8%
合計	446	100.0%

表3. 基礎教育自由記述カテゴリー別キーワード集計

キーワード		カテゴリー1		カテゴリー2		カテゴリー3		合計	
		集計件数	割合(%)	集計件数	割合(%)	集計件数	割合(%)	集計件数	割合(%)
1 カリキュラム	1-1 基礎ゼミ	22	3.5%	29	4.6%	18	2.8%	69	10.8%
	1-2 実践英語	17	2.7%	43	6.8%	14	2.2%	74	11.6%
	1-3 情報リテ	20	3.1%	11	1.7%	5	0.8%	36	5.7%
	1-4 都プロ	11	1.7%	43	6.8%	54	8.5%	108	17.0%
	1-5 基礎教育仕組み	4	0.6%	1	0.2%	3	0.5%	8	1.3%
	1-6 第2外国語	0	0.0%	5	0.8%	4	0.6%	9	1.4%
	1-7 専門科目	0	0.0%	1	0.2%	9	1.4%	10	1.6%
	1-8 教職科目	0	0.0%	1	0.2%	9	1.4%	10	1.6%
	1-9 その他	1	0.2%	4	0.6%	5	0.8%	10	1.6%
2	時間割	1	0.2%	45	7.1%	127	20.0%	173	27.2%
3	授業内容	22	3.5%	17	2.7%	7	1.1%	46	7.2%
4	施設設備	2	0.3%	5	0.8%	1	0.2%	8	1.3%
5	教員	2	0.3%	13	2.0%	3	0.5%	18	2.8%
6	大学改革	0	0.0%	0	0.0%	5	0.8%	5	0.8%
7	その他	24	3.8%	16	2.5%	12	1.9%	52	8.2%
合計		126	19.8%	234	36.8%	276	43.4%	636	100.0%

(別紙)

基礎教育に関するアンケート調査

以下の設問に対して、マークカードの該当する箇所に H か HB の鉛筆でマークして下さい。

(マークカードの該当しない欄は空欄のままです。)

【あなた自身のことについて】

性 別 1. 男 2. 女
学 年 1. 1年 2. 2. 3. 3. 4. 4. 5. 5. 6. 6. 7. 7.
学系・学部等 1. 人文・社会系 2. 法学系 3. 経営学系 4. 理工学系 5. 都市環境 6. システムデザイン 7. 健康福祉

以下の質問について、次の5段階評価に従って最も適切と思われる番号をマークカードにマークして下さい。

強くそう思う そう思う どちらとも言えない そう思わない 全くそう思わない

5-----4-----3-----2-----1

【基礎ゼミナール】

1. 私は、この授業に興味をもって主体的・意欲的に取り組むことができた。 5-----4-----3-----2-----1
2. 問題発見とその解決に向けた取り組みの能力が身に付いた。 5-----4-----3-----2-----1
3. ディスカッションやプレゼンテーションの能力が身に付いた。 5-----4-----3-----2-----1
4. 教員やゼミの仲間と親密に学習に取り組むことができた。 5-----4-----3-----2-----1

【実践英語】

5. 私は、この授業に興味をもって主体的・意欲的に取り組むことができた。 5-----4-----3-----2-----1
6. コミュニケーション能力など実践的な英語の力が身に付いた。 5-----4-----3-----2-----1
7. 日本人教員とネイティブ講師の授業の組み合わせに興味を持って学習できた。 5-----4-----3-----2-----1
8. 教員やクラスの仲間と親密に学習に取り組むことができた。 5-----4-----3-----2-----1

【情報リテラシー実践 I】

9. 私は、この授業に興味をもって主体的・意欲的に取り組むことができた。 5-----4-----3-----2-----1
10. パソコンの活用能力が身に付いた。 5-----4-----3-----2-----1
11. 情報活用能力が身に付いた。 5-----4-----3-----2-----1
12. 教員やクラスの仲間と親密に学習に取り組むことができた。 5-----4-----3-----2-----1

【都市教養プログラム科目】

13. 私は、この授業に興味をもって主体的・意欲的に取り組むことができた。 5-----4-----3-----2-----1
14. 都市に関連する課題を系統的に学ぶ仕組みに興味を持つことができた。 5-----4-----3-----2-----1
15. 選択した科目は自分の関心に合っていた。 5-----4-----3-----2-----1
16. 都市に関連するテーマに総合的・学際的にアプローチする考えが身に付いた。 5-----4-----3-----2-----1

【首都大学東京の基礎教育の仕組みについて】

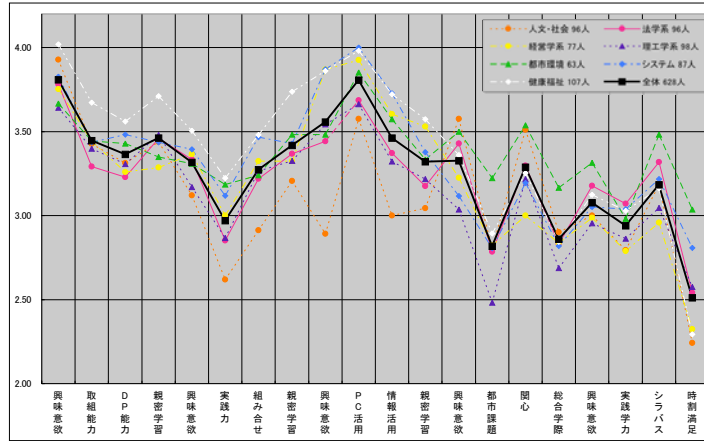
17. 本学の基礎教育の仕組みに興味を持って主体的・意欲的に取り組むことができた。 5-----4-----3-----2-----1
18. 本学の基礎教育によって実践的な学力が身に付くと感じる事ができた。 5-----4-----3-----2-----1
19. 受講した基礎教育科目のシラバスと授業内容はほぼ合致したものであった。 5-----4-----3-----2-----1
20. 基礎教育の授業科目の選択にあたって、時間割の編成は満足できるものであった。 5-----4-----3-----2-----1

【自由記述：マークカードの裏面に自由に記述して下さい。】

- ① 基礎教育の授業科目を受講するにあたって、あなたがよかったと思うことはなんですか。
② 基礎教育の授業科目を受講するにあたって、あなたが改善して欲しいと思うことは何ですか。
③ 時間割、開講時限やカリキュラムに関して、何でもよいので自由に意見を述べて下さい。

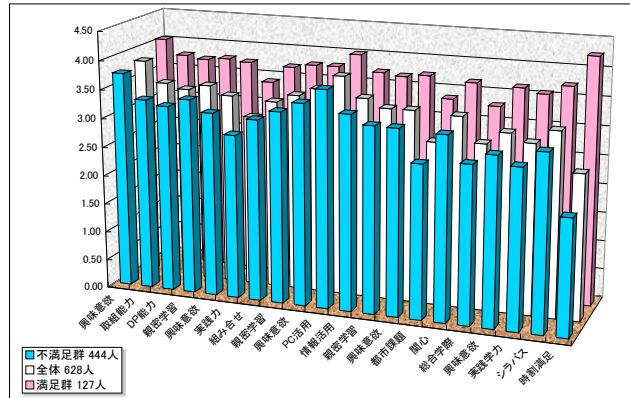
(ご協力有り難うございました。 首都大学東京基礎教育センターおよび教務委員会基礎教育部会)

図・表2 <基礎教育 学部・学系別 平均値>



		基礎スキル				実践英語				情報リテラシー実践I				都市教養7プログラム科目				基礎教育の仕組み			
		興味意欲	取組能力	DP能力	親密学習	興味意欲	実践力	組み合せ	親密学習	興味意欲	PC活用	情報活用	親密学習	興味意欲	都市課題	関心	総合学習	興味意欲	実践力	シラバス	持前満足
人文・社会	96人	3.93	3.43	3.31	3.44	3.12	2.62	2.91	3.21	2.89	3.58	3.00	3.04	3.58	2.80	3.51	2.90	3.00	2.79	3.18	2.24
法学系	96人	3.78	3.29	3.23	3.46	3.33	2.85	3.22	3.37	3.44	3.69	3.37	3.17	3.43	2.79	3.30	2.83	3.18	3.07	3.32	2.54
経営学系	77人	3.75	3.44	3.26	3.29	3.37	3.00	3.32	3.32	3.87	3.93	3.60	3.53	3.22	2.82	3.00	2.84	2.99	2.79	2.96	2.32
理工学系	98人	3.64	3.40	3.31	3.48	3.17	2.87	3.27	3.33	3.54	3.66	3.32	3.22	3.04	2.48	3.22	2.69	2.95	2.86	3.05	2.57
都市環境	63人	3.67	3.44	3.43	3.35	3.31	3.19	3.24	3.48	3.48	3.85	3.57	3.33	3.50	3.22	3.54	3.17	3.31	2.88	3.48	3.04
システム	87人	3.83	3.44	3.48	3.44	3.39	3.12	3.47	3.43	3.87	4.00	3.73	3.38	3.12	2.81	3.19	2.82	3.05	3.04	3.22	2.81
健康福祉	107人	4.02	3.67	3.56	3.71	3.50	3.22	3.48	3.74	3.86	3.98	3.72	3.57	3.36	2.89	3.25	2.84	3.12	3.03	3.16	2.29
全体	628人	3.81	3.45	3.36	3.46	3.32	2.97	3.27	3.42	3.56	3.80	3.46	3.32	3.33	2.82	3.29	2.86	3.08	2.94	3.18	2.51

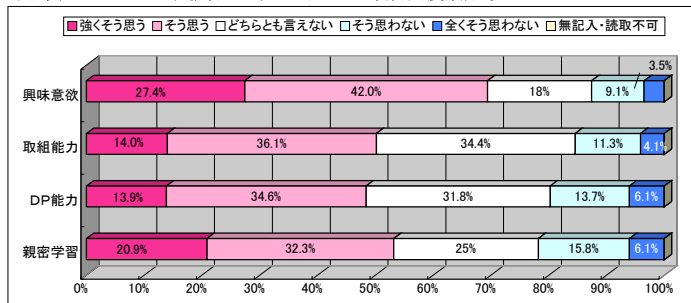
図・表3 <基礎教育 時間割満足・不満足別 平均値>



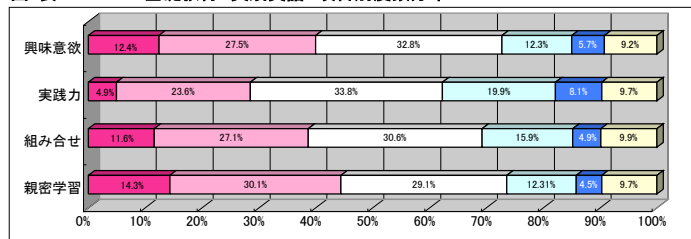
問20		基礎スキル				実践英語				情報リテラシー実践I				都市教養7プログラム科目				基礎教育の仕組み			
		興味意欲	取組能力	DP能力	親密学習	興味意欲	実践力	組み合せ	親密学習	興味意欲	PC活用	情報活用	親密学習	興味意欲	都市課題	関心	総合学習	興味意欲	実践力	シラバス	持前満足
全体	628人	3.81	3.45	3.36	3.46	3.32	2.97	3.27	3.42	3.56	3.80	3.46	3.32	3.33	2.82	3.29	2.86	3.08	2.94	3.18	2.51
不満足群	444人	3.75	3.32	3.24	3.39	3.19	2.84	3.14	3.31	3.49	3.75	3.37	3.21	3.21	2.65	3.17	2.72	2.91	2.75	3.03	2.01
満足群	127人	4.05	3.79	3.74	3.78	3.74	3.42	3.71	3.78	3.78	4.02	3.73	3.69	3.74	3.37	3.68	3.31	3.65	3.57	3.74	4.27
無記入	57人	3.72	3.67	3.49	3.32	3.43	2.82	3.30	3.50	3.78	3.56	3.90	3.22	3.14	3.14	3.57	3.50	3.20	3.25	2.00	-

--は無記入によりデータ無し

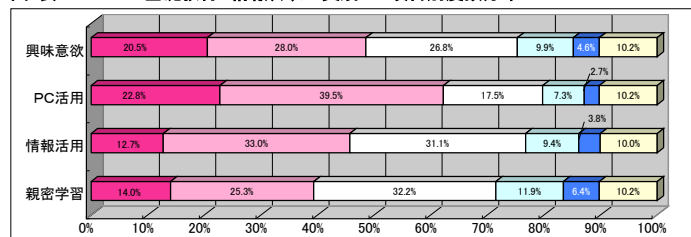
図・表1-1 <<基礎教育 基礎ゼミナール 項目別度数分布>>



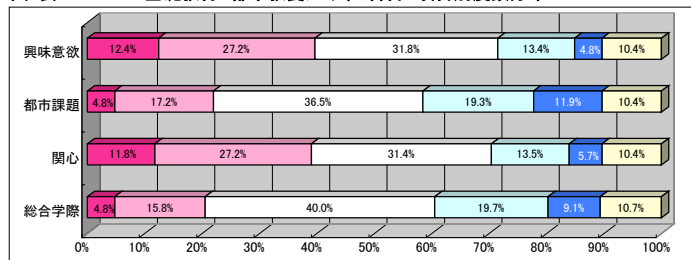
図・表1-2 <<基礎教育 実践英語 項目別度数分布>>



図・表1-3 <<基礎教育 情報リテラシー実践Ⅰ 項目別度数分布>>



図・表1-4 <<基礎教育 都市教養プログラム科目 項目別度数分布>>



図・表1-5 <<基礎教育 基礎教育の仕組みについて 項目別度数分布>>

